

国

語

(解答番号)

1

～

38

第4問

次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)(配点50)

隋田・楊(注1)与(ア)ニ鄭(注2)法士(ハ)俱(ニ)以(テ)能(ク)画(ル)名(アリ)法士(ニ)自知(ル)芸(ハ)不如(ク)楊(ト)也。

乃(チ)從(ヒ)楊(ニ)求(ム)画(ル)本(ヲ)楊(ハ)不(レ)告(ゲ)之(ニ)。一日(ニ)引(キ)法士(ヲ)至(リ)朝堂(ニ)指(ス)以(テ)宮闕(ニ)。

衣冠・人馬・車乘(ヲ)曰(ク)「此吾画本也。子知(ル)之(ヲ)乎(ト)。」由(リ)是(ニ)法士悟(リ)而

芸進(ス)。

唐韓幹(注4)以(テ)貌(カ)馬(ヲ)召(サ)入(リ)供奉(ス)明皇(注6)詔令(ヲ)從(リ)陳闕(注7)受(ル)画法(ヲ)。幹

因(リ)奏(ス)臣(ニ)自(ラ)有(リ)師(ヲ)。陛下(ノ)内廐(注8)飛黃・照夜(注9)五方(ノ)之乘(ヲ)皆(レ)臣師(ト)也。

帝然(リ)之(ヲ)。其後幹画遂果踰(ル)閼(ヲ)。

若(キ)楊・韓二子(ノ)可(キ)謂(フ)能(ク)求(ム)其真者(ト)也。彼以(テ)似(ク)求(ム)似者(ハ)則(チ)益(ス)。

遠シ矣。今之學者、雖モ曰フ求ム聖人之經(注10)固(イ)已ニ非ズ其真ニ。乃チ舍テ經ヲ而

專ラ求ム訓(注11)詰コ則チ又タ求ム似ル其似タル之ニ者ナリ矣。不モ尤トモ遠カラ乎。

(胡直『衡廬精舍藏稿』による)

(注) 1 田・楊——田僧亮と楊契丹のこと。ともに隋代の画家。

2 鄭法士——隋代の画家。

3 宮闕——宮殿のこと。

4 韓幹——唐代の画家。

5 供奉——官名。才芸あるものが皇帝の身边に仕えた。

6 明皇——唐の玄宗皇帝。

7 陳閔——唐代の画家。

8 飛黄・照夜——ともに駿馬の名。

9 五方之乘——各地方から集められた馬。

10 經——聖人の教えや言行を記した書物。

11 訓詰——「經」の字句の注釈。

問1 二重傍線部(ア)「与」・(イ)「固」の読み方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選

べ。解答番号は

31

32

(ア)

- 31 「与」
-
- ⑤ あたへて
④ と
③ くみして
② より
① あづかりて

(イ)

- 32 「固」
-
- ⑤ かへつて
④ ゆゑに
③ もとより
② かたく
① つねに

問2 傍線部A「法士自知芸不如楊也」・傍線部B「明皇詔令從陳闕受画法」の返り点の付け方と書き下し文の

組合せとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

A 法士自知芸不如楊也 33

① 法士自知_レ芸不如_レ楊也 法士芸を知りてより楊のごとくならざるなり

② 法士自知_ニ芸不如_レ楊也 法士自ら芸の楊に如_レかざるを知るなり

③ 法士自知_レ芸不如_レ楊也 法士自ら芸を知ること楊のごとくならざるなり

④ 法士自知_ニ芸不如_レ楊也 法士自ら芸の如かざるは楊なるを知らんや

⑤ 法士自知_レ芸不如_レ楊也 法士芸の楊のごとくならざるを知るによらんや

B 明皇詔令從陳闕受画法 34

① 明皇詔令_ニ從陳闕受_ニ画法_一 明皇詔して從ひし陳闕をして画法を受けしめんとす

② 明皇詔令_レ從陳闕受画法_一 明皇詔して陳闕の受けし画法に從はしめんとす

③ 明皇詔令_下從陳闕受_中画法_上 明皇詔して陳闕に從ひて画法を受けしめんとす

④ 明皇詔令_ニ從陳闕受_ニ画法_一 明皇詔して陳闕を令從し画法を受けしめんとす

⑤ 明皇詔令從陳闕受_ニ画法_一 明皇詔して令從の陳闕をして画法を受けしめんとす

問3

傍線部(1)・(2)の「画本」は、いずれも「絵の手本」という意味であるが、それぞれが指示する内容は異なっている。両者の相違を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35

- ① (1)は絵の描き方が示された書物を想定しており、第二段落では「画法」がこれと対応している。一方、(2)は手本とすべき絵を指しており、第二段落では「幹画」がこれと対応している。
- ② (1)は手本とすべき絵を想定しており、第二段落では「画法」がこれと対応している。一方、(2)は描くべき対象の種類を指しており、第二段落では「臣師」がこれと対応している。
- ③ (1)は絵の描き方が示された書物を想定しており、第二段落では「臣師」がこれと対応している。一方、(2)は描く対象そのものを指しており、第二段落では「画法」がこれと対応している。
- ④ (1)は描く対象そのものを想定しており、第二段落では「馬」がこれと対応している。一方、(2)は描くべき対象の種類を指しており、第二段落では「臣師」がこれと対応している。
- ⑤ (1)は手本とすべき絵を想定しており、第二段落では「画法」がこれと対応している。一方、(2)は描く対象そのものを指しており、第二段落では「臣師」がこれと対応している。

問4 傍線部C「可謂能求其真者也」とあるが、絵画における「真を求むる者」とはどのような人物であると、筆者は考えているか。それを説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 絵画の理論や技巧を求めるのではなく、絵を描くことを通して普遍的真理を得ようとする人物。
- ② 朝堂の壁画や皇帝秘蔵の絵画を研究して、古人の画法の特徴を自ら学びとろうとする人物。
- ③ 自分よりも優れた人物を自ら探し求め、その人物に師事して絵画の本質を探ろうとする人物。
- ④ 名画や有名な画家から学ぶのではなく、対象をよく観察してその実体を写しとろうとする人物。
- ⑤ 他人の意見に左右されることなく、自分の信念に従って独自の画法を見いだそうとする人物。

問5 傍線部D「乃舎経而専求訓詁」とあるが、「経」と「訓詁」に関する筆者の考え方を説明したものとして最も適当なもの、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 「経」は真の似であり「訓詁」も真の似である。したがって、真を求める学者は「経」と「訓詁」に精通する必要がある。
- ② 「経」は真の似であり「訓詁」は似の似である。したがって、真を求める学者は「経」の内容を探究する必要がある。
- ③ 「経」は似の似であり「訓詁」も似の似である。したがって、真を求める学者は「経」も「訓詁」もともに必要としない。
- ④ 「経」は似の真であり「訓詁」は似の似である。したがって、真を求める学者は「経」の価値を判断する必要がある。
- ⑤ 「経」は似の真であり「訓詁」は真の似である。したがって、真を求める学者は「訓詁」の意味を理解する必要がある。

問6 この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 38。

- ① 「今の学者」の抱える問題点について、「宮闕・衣冠・人馬・車乗」、「飛黄・照夜・五方の乗」などを「訓詁」の^ひ比^ゆと^して挙げることによつて、読者の理解を容易にしている。
- ② 鄭法士と陳閔の二人の画家を「聖人」の比喩として挙げ、彼らが「真を求むる者」であることを示したうえで、ひたすら^ひた^すら^ら似を求め「今の学者」の問題点を、読者に訴えかけている。
- ③ 「真を求むる」方法は多様であることを画家の逸話によつて例示し、それを前提としたうえで、学問における「今の学者」に対する筆者の批判を、「已」「又」などを多用しながら、論理的に展開している。
- ④ 多くの対象を「画本」として絵を描くことができる画家と、一つの対象しか「師」にできない画家とを対比的に例示することによつて、「訓詁」に専心する「今の学者」に対する筆者の批判を提示している。
- ⑤ 「真を求むる者」の具体例として画家の逸話を挙げ、これと「今の学者」の問題とを対比的に論じることによつて、学問における真とは何かという問題を、読者に投げかけている。